出光美術館所蔵青白磁刻花渦文梅瓶に関する一考察

石岡　ひとみ

一、はじめに

愛媛県美術館では、平成二十四年十二月二十二日から平成二十五年一月二十六日まで「出光美術館所蔵文人画名品展」を開催した。その際、出光美術館から重要美術品の愛媛県松前城跡出土青白磁刻花渦文梅瓶（以下「松前城梅瓶」と略す）を特別にご出品いただき、展示する機会を得た（図1）。このことは、伊予松前城跡から出土した松前城梅瓶の里帰りであり、愛媛県における初公開となった。

松前城梅瓶の出土地は、かつて『陶磁全集』などに「伝松山城跡出土」と記述されていたことが多い（註1）。しかし近年では「伝松前城跡出土」と紹介されている（註2）。松前城と松山城はいずれも賤ケ嶽七本槍の一人として知られる加藤嘉明にゆかりのある城である。

松前城梅瓶は出土品にも関わらず完形で出土し、美術工芸品としても価値が高く、重要美術品に指定されている。筆者は、松前城梅瓶を愛媛の重要な文化財と考え、その出土地等を解明するために関係資料を調査したところ、出土地の記録などに新たに知見を得ることができたので小稿で紹介したい。また、青白磁の梅瓶は中世伊予の遺跡からも出土しているがいずれも小破片である。松前城梅瓶のように完形で出土することは極めて特異な事例といえる。そのことがいかなる意味を示しているのかを合わせて考察したい。

二、松前城梅瓶の概要

松前城梅瓶の口縁上部は、平らな形状を呈し、口が小さく頸部が締まる。肩が張り、底部に向かってすぼまる形状の「梅瓶」である。梅瓶は、酒を入れる容器として用いられ、本来、蓋を伴うが、松前城梅瓶には蓋が伝わっていない。大きさは高さ二五．六㎝、口径四．〇㎝、胴径一八．一㎝、底径九．六㎝を測る。胴部上方に最大径をもつ。

ロクロによる成形である。口縁上面は平らで、頸部外面には尖った突帯が付く。肩部と裾部には、先端が尖った工具によって沈線で二重圏線を描く。その間に櫛描きで下から上に向かって三区分する線を描く。その上に櫛描きによる渦文が全面に巡る。渦文は右・左側とも下から上に渦を描き、中央に小さい渦を輪状に描く。櫛状工具は六本の歯をもつ。描き始めは彫り込みが深く、捻りにより上部に向かって細くなる。底部は削り出し高台、無釉露胎で、鉄分によりやや褐色を呈す。微量に鉄分を含み透明感のある水色に発色している釉を口縁の内部から外面の底部近くまで全面に掛け、櫛描きの釉溜まりは青い。そのため松前城梅瓶は青白磁に分類できる。肩部から胴部にかけて明るい褐色を呈す部分が見られる。これは焼成時によるものか不明である。上面に一部、鉄斑がある。

松前城梅瓶の産地は中国福建省系とされ、一三～一四世紀代のものと考えられている（註3）。生産年代を限定するため、遠藤氏の青白磁梅瓶の研究（註4）を援用すると、器形や渦巻文の描き方などから一三世紀中頃～後半代に生産された可

能性がある。青白磁梅瓶の産地比定については、江西省景徳鎮窯とそれを模倣した福建省窯の製品との区別が現段階では難しい。筆者は、中国大陸の窯跡資料を実見していないため、産地比定の限定の根拠は示せないため、これまでの説を踏襲したい。

三、青白磁梅瓶出土の意味

国内出土の青白磁梅瓶を検討した内野氏の研究（註5）により、梅瓶は器形と文様から大きく三タイプに分類されている。文様は渦巻文様を櫛目で表した「渦巻様の文様・渦文」のA類と、蓮花や牡丹、唐子を陽刻した「精巧な彫刻・唐草文」のB類とに大別される。さらにB類は、頸部中央に突帯が付くものをB―1類、口縁が外曲するものをB―2類と細分する。

完形の青白磁梅瓶を分類すると、A類では、奈良県談山神社に伝世する青白磁雲唐草文梅瓶、広島県草戸千軒町遺跡出土の青白磁渦文梅瓶がある。松前城梅瓶もA類に属す。それは神奈川県鎌倉今小路西遺跡（御成小学校）北面三から面出土した青白磁渦巻文梅瓶（図2）（註6）に器形、文様が類似している。

B類には、茨城県長岡町出土の白磁牡丹蓮花唐草文梅瓶B―1類（東京国立博物館蔵）、京都市岡崎公園法勝寺跡出土の白磁唐子唐草文梅瓶B―1類（京都国立博物館蔵）・伝京都市太秦井戸廃寺出土白磁牡丹唐草文梅瓶B―2類（愛知県陶磁美術館蔵）などがあげられる。

青白磁梅瓶は、内野氏の研究（註7）により鎌倉からの出土量が多いことが判明した。鎌倉以外ではB類が少なく、A類が多い。青白磁梅瓶の製作年代は南宋から元代と考えられ、鎌倉の搬入の盛期は一三世紀後半～一四世紀前半とされる。鎌倉では蓋部の出土が多い。出土遺跡の性格は城館や邸宅、寺院関係のものが多く、一般庶民の生活に関わる遺跡からの出土例は少ない。内野氏は「純粋に骨董美術品として所有された場合の他、鎌倉以来の名家であることの証として、青白磁梅瓶が伝世されていた可能性も見逃せない」（註8）と指摘している。

愛媛県内における青白磁梅瓶の出土例は、青白磁梅瓶の生産年代に近い一四世紀の流通拠点である集落遺跡の松山市南江戸鬮目遺跡などに見られる（註9）。しかし、青白磁梅瓶の生産年代から数世紀を経た中世後期の城館である、松山市道後湯築城跡、芸予諸島の今治市能島城跡からも青白磁梅瓶の小破片が出土している。湯築城跡は、伊予国の守護河野氏の居城で、青白磁刻花渦文の胴部小片（図3）が丘陵西側から出土している（註10）。湯築城跡では、上級武士居住区、家臣団居住区、丘陵部から、制作年代が一三～一四世紀の骨董的な貿易陶磁が出土した。なかでも高麗青磁の梅瓶底部片は戦国期の城館ではほとんど出土類例がなく、貴重な事例といえる。これらは威信財（ステイタス・シンボル）としての陶磁器と見なされている（註11）。また、能島城跡は、能島村上氏の居城と考えられる海城で、史跡整備に伴って発掘調査が行われている。海岸部の南部平坦地と郭Ⅱ東区から、青白磁刻花渦文梅瓶の胴部片（図4・5）が出土している（註12）。これら威信財として所有していた可能性がある。

先学の研究により、青白磁梅瓶は、白磁四耳壺、青磁盤、酒会壺、花生、天目茶碗、茶入等とともに、中世社会において希少価値があり、高級品として珍重され、それを所有することは、威信財としての役割を果たしたという見解が提示されている（註13）。伝京都市太秦井戸廃寺出土の青白磁牡丹唐草文梅瓶は、南宋時代の梅瓶で、地中に埋納された時期は未詳であるが、類例から戦国期に上級階級で梅瓶が賞玩されていたことが考えられている（註14）。

戦国武将として青白磁梅瓶などの唐物の骨董品を所持すること、それを会所の座敷飾りとすることにより、権力の象徴となり、武家儀礼に重要な役割を果たすものであったと考えられる。

以上のことを考え合わせると、松前城梅瓶も戦国期の武将が一三世紀後半の青白磁梅瓶に骨董的価値を認め、威信財として所有した可能性がある。

四、出土地について

（一）箱書

次に松前城梅瓶の出土地について箱書の内容を検証してみよう。

多くの陶磁器の図録では、松前城梅瓶は、「白磁唐草文瓶」と表記され、出土地は「（伝）松山市松山城跡」（註15）と記述されてきた。近年、出光美術館の図録に、「伝松前城出土」と紹介されている（註16）。本資料の箱には由来が書かれた蓋が二点伴う。資料1は蓋のみが残っている。

資料1（図6）

箱表「古青磁壺　壱個」

箱裏　明治四十壱年伊予国伊予郡松前村之浪人鶴崎晴夫氏加藤嘉明築城之松前城跡より同村耕地整理之砌本青磁ノ壺を発掘同氏秘蔵之処拙者懇望譲り請たるもの也

大正五年弐月廿六日　土井田蔵

松前ハ昔蒲生氏ノ跡也

資料2（図7）

箱表「青磁　瓶子」

箱裏　影青劃花文瓶子ハ宋代の作昔時日幸ニ請来　今日稀ニ富貴の古墳より出土を見る　是品を明治四十一年伊予国伊予郡松前城跡より発掘せし物也

胴部鉄サビ附着せるは副葬品の痕なりと云ふ

陶工　北琅（印）

昭和二十四年五月二十八日

文部省重要美術品に認定せらる（印）

二つの箱書から、明治四十一年の耕地整理の際、松前城跡から青磁壺が出土し、発掘者の鶴崎氏の所有となるが、大正五年には土井田氏が所有、その後、陶工の北琅が入手し、資料2の箱を製作した経緯がわかる。松前城梅瓶は、現在の分類は「青白磁」「梅瓶」とするが、かつて「青磁」「壺」「瓶子」と認識していたことがうかがえる。

次に、「青磁」「明治四十一年」「松前城跡」「耕地整理」「発掘」「北琅」という手掛かりから探ってみたい。

（二）耕地整理について

明治四十一年の耕地整理について記録を見ていきたい。松前町では、明治時代に耕地整理が行われていたことが、『松前町沿革史』（昭和六年）の記事からわかる。

明治四一年一二月一日　大字筒井、濱、耕地整理組合ヲ創設シ本日起工シ明治四十三年五月二十日竣工ス。

位置ハ松前城址ヲ中心トシ整理面積三百七町一反七畝余、総工費壱萬四千弐百七拾余円ニシテ組合長赤星平次郎氏之レヲ擔任ス。

同書から、松前町内で明治四十一（一九〇八）年一二月一日～明治四十三（一九一〇）年五月二〇日に松前城跡を中心に耕地整理が実施されたことがわかる。明治四十一年の「海南新聞」にも耕地整理の記事が見られ、「箱書」の「耕地整理」と一致し、このことが裏付けられる。

（三）松前城跡出土青磁の記録

松前城に関する資料として、「正木史料」第五巻に興味深い記述がある。「正木史料」は、大正時代に伊予史談会の西園寺源透により編纂された松前城や加藤家に関する記録である（図8）（註17）。

一、同村鶴崎晴夫ノ二ノ丸ヨリ発掘シタル物品数十点ヲ有ス、仝人ノ耕地整理ノ工事ヲ請負タル人ナリ、出品物中高麗青磁過半ナリ　○平皿径七寸一分ナリ○丼径四寸○小丼二ヶ径三寸二分○小皿径三寸三分乃至五分九ヶ多くハ青磁ナレドモ茶色ヲ帯タルモノアリ。小瓶二分高二寸六分○小皿七稜形径三寸一ヶ○フリダシ茶色一ヶ○水差破残リ一ヶ　以上十二ヲ除ケバ皆青磁○硯二ヶ○刀ノ破片、銅器ノ破片、朝鮮土器ノ一部灰色ニシテ沢アリ量軽シ　小銭五、六文中ニ洪武通室（寶）アリ、加治十製ナラント云者アリ。以上ノ品大瓶ニ容レテアリシモ瓶ハ破壊シタリ。余按ズルニ所持者ハ大切ノ品トシテ土中ニ隠シ置キタルモノナラン

一、本丸ヨリ瓦出タリ中ニ巴瓦ノ口ニ藤ノ紋アリタルモアリ紛失シ今見エズト云フ

一、二ノ丸ヨリハ五輪塔多ク出ヅ鶴崎氏ニモアリ某々等二三人ノ内ニモアリ学校ニモ有ス、又古キ石地蔵モ出ツ矢野堂ニ入レアリシガ之ハ学校ニ蔵セリ、之ヲ以テ考フルニ往古定善寺（性尋寺、又松尋寺ト云フ誂ナルベシ金蓮寺ノ前名）ノ在リシ所ナラン

「正木史料」によると、松前城跡二ノ丸で耕地整理が行われ、その工事請負人の鶴崎晴夫が松前城二ノ丸から出土した資料を所持していた。資料の大半が高麗青磁であった。出土した資料は平皿直径約二一．五㎝、丼直径一二㎝、小丼径約九．七㎝が二点、小皿径九．九㎝～一五㎝が九点。これらはいずれも青磁であるが、なかには茶色を帯びたものもあった。このことから、釉の発色がオリーブ色や茶褐色を呈す青磁と考えられる。他に小瓶が○．六㎝、高さ約七．九㎝、七稜形の小皿径九．四㎝が一点。茶色の「ふりだし」一点、割れた水差一点があり、一、二点を除いて多くは青磁であった。他に、硯二点、刀の破片、銅器の破片、朝鮮土器の灰色の破片の一部が出土した。また、銭貨も五、六枚出土し、洪武通寶（明銭、初鋳一三六八年）等があった。これらの資料は「大瓶」に入れてあったがその瓶は破損していたという。西園寺源透は、所有者が大切な品物のため土中に隠し置いたものと考えている。

「正木史料」により、松前城跡二ノ丸から多数の貿易陶磁器が出土したことがわかる。その出土状況は、大甕の中に多数の貿易陶磁器を入れて埋納していたことがうかがえる。「高麗青磁」とあるが、釉の発色がオリーブ色や茶褐色を呈す青磁で、器形や伊予出土の貿易陶磁器の類例から、これらは中国青磁と考えられ、青白磁梅瓶も出土した可能性が高い。青白磁梅瓶が単独で地中に埋納されていたのではなく、大甕の中に納められ、入れ子構造になっていたため、土圧により破損を防ぐことができたと考えられる。

他に松前城跡本丸からは、巴文に藤文の瓦が出土、二ノ丸からは五輪塔が多く出土した。これは松前城の地にはかつて金蓮寺（定善寺）が所在していたことによるものと考えられていたことがわかる。

前述の通り、松前城跡の耕地整理は明治四十一（一九〇八）年に実施され、さらに「正木史料」から、この耕地整理の際に、多数の貿易陶磁や金属製品の出土品があったことが判明した。松前城梅瓶が同四十一年に発掘したとする箱書から、耕地整理を始めてすぐに陶磁器類が出土したことが推察される。筆者は松前城梅瓶や、一緒に出土した遺物について所在の聞き取り調査を行ったが、現在のところ、有益な情報は得られていない。

五、松前城と加藤嘉明

（一）松前城

伊予松前城は、瀬戸内海の伊予灘に面する中世の城郭で、現在の伊予郡松前町筒井に所在した。松前城の名は、建武三（一三三六）年の三島家文書に「松崎城」とあるのが初見である（註18）。河野通盛が支配し、砥部の大森氏、次に荏原城の平岡氏、戦国期には栗上氏が支配し、松前城は湯築城の出城として機能した。

松前城について、江戸時代の伊予国地誌『予陽郡郷俚諺集』（註19）に以下の記

述がある。

〈前略〉将軍家より、藤堂和泉守高虎と加藤左馬介嘉明とに弐拾万石宛賜ふ、文禄四乙未年、伊予郡松前浜燈炉堂金蓮寺に移す、其跡へ国府拝志城をひく、加藤左馬介入部也、慶長八癸卯、嘉明松前城を引て松山城を築く、本松前城山、東南北の三方は山遠く、城辺は底深き沼也、西は九州に続たる滄海也、日本第一の城郭と語り伝ふ、(後略)

加藤嘉明は、文禄の役の功績により六万石に加増され、文禄四（一五九五）年に伊予松前に入部する。その際、金蓮寺を移し、そこに松前城を築城、城下町を形成した。その後、嘉明は慶長二（一五九七）年に朝鮮出兵の功績により一〇万石を領し、さらに関ヶ原の功により二〇万石に加増され、慶長七（一六〇二）年、松山平野の勝山に築城を着手、慶長八（一六〇三）年、松山に入城し、松前城は廃城となった。松前城と松山城の位置関係は図9を参照。

西園寺源透によると、『伊予郡手鑑』（「筒井村」の「正木古城」の条）には、古城本丸は東西五十間、南北六十五間、古城二ノ丸は東西四十九間、南北百六十二間、内堀は古城の東、二ノ丸畑の間にあり、龍燈松は二ノ丸畑の南にあり、本丸よりは辰巳に当れりと記述されている（註21）。松前城下町を復元した富田氏の研究によると、松前城の本丸は、現在の東洋レーヨン愛媛工場敷地、二ノ丸は、本丸の南側、現在の東洋レーヨン愛媛工場前に所在する松前城跡石碑の後方、東側の範囲に広がる場所が比定されている（図10）（註22）。現在、松前城跡の碑がある丘陵には大正時代に枯れた「龍燈松」があったといわれている。「龍燈松」は金蓮寺の前身の定善寺の時代に植えられたとされる松の木である。

（二）加藤嘉明の伝説

加藤嘉明と青磁壺とのかかわりについて、「正木史料」第五巻（註23）に興味深い記述がある。

嘉明朝鮮より齎したる青磁の碟子十枚あり。日常座側に置て之を愛玩す。一日侍士誤て其一を砕く。侍士恐怖して之を告く、嘉明頷て一語を発せず。翌日某を召す、其意へらく死を賜るならんと出て見ゆ。嘉明残の碟子を庭石に抛ち悉く之を破り、且曰く如此せしは汝か所為を怒りて為すにはあらず。此碟子にして永く存せんか、汝の過ちは永遠に消さるべし。余骨董愛玩の故を以て、家臣の過ちを後世に伝ふるに忍びずと。

「正木史料」によると、加藤嘉明は朝鮮半島から持ち帰った青磁の碟子十点を大事にしていたが、その一つを家臣が割ってしまった。嘉明は大事なのは碟子ではなく家臣の命であるとして、残りの青磁を割ったという。貴重な貿易陶磁の碟子よりも家臣の命を尊重した加藤嘉明の人格を称えた伝説である。そこから読み解けることは、加藤嘉明が朝鮮半島より多くの貿易陶磁を持ち帰っていること、その中の「青磁の喋子十枚」は、高麗青磁もしくは中国青磁のことで、喋子は徳利や壺状のやきものと考えられる。

同様の話が、真田増誉『明良洪範』巻十一「加藤嘉明、士を愛す附その剛勇」（註24）にも「南蛮皿」十枚の話が掲載されている。『明良洪範』は江戸時代中期の逸話・見聞集である。

加藤左馬助嘉明は初めは小身成しが後に会津四十万石を領し、智勇仁徳の良将也。故に土民よく伏する也。慶長年中、南京より渡る所の成化年製の焼物の器を多く買入れたり。其中十枚小皿あり。是は世に云、虫喰南京と云物にて、藍色土目等得も言れぬ出来也とて、殊に秘蔵しけるに、或時、客饗応の節、近習の士、其小皿を一つ取落し破る。其士、大に恐れ閉居せんとする由を聞き、早々呼出し、皿破る迚何ぞ閉居するに及んや。敢て苦しからず。残りの皿を取

寄せ、悉く打砕きて此皿九枚残り有る中は一枚誰が麁相して破ったりと、いつ迄も汝が麁相の名を残す事、吾本意に非ず。何程尊き器物なりとも家人には替難し。凡そ器物草木鳥類などを愛する者は其の為に却て家人を損う事出来る物也。是主たる者の心得べき事也。珍器奇物は有ても無ても事欠ず。家人は吾四肢也。一日も無くては成らぬ者也。天下国家を治るも家人有る故也と語られしと其近習の士話されしと也。（後略）

『明良洪範』では、青磁喋子が「南蛮皿」に替わっている。それは藍色で虫喰いがあることから、明末清初の中国景徳鎮民窯の青花皿と考えられる。これは近世武家屋敷から出土する貿易陶磁で、江戸時代の日本で好まれた製品である。

以上、二つの伝説は青磁や青花の違いはあるが、加藤嘉明が朝鮮出兵の機に、朝鮮半島から日本へ中国陶磁器を多数持ち帰り、所有していたことを示唆している。一六世紀末に朝鮮半島から国内に多くの貿易陶磁が搬入された背景には朝鮮出兵が関わっていたことがうかがえる。

六、埋納の謎

松前城周辺の耕地整理によって、青磁壺の他、多数の貿易陶磁が出土したことが判明した。さらに大甕の中に貿易陶磁器や金属器が埋められていた状況が明らかとなった。このことはいかなる意味があるのだろうか。

前述の通り、「正木史料」を編纂した西園寺源透も「余按ズルニ所持者ハ大切ノ品トシテ土中ニ隠シ置キタルモノナラン」とあるように、地中に埋蔵して大事なものを隠していたと考えている。中世には地中に銭貨や陶磁器等を埋められた事例が多い（註25）。その意図には、戦乱を避けて地中に金品を隠匿することや、神仏への祈願のために埋納することなどが考えられている。松前城梅瓶のように陶磁器類を廃棄ではなく、完形の形を保って埋めることは、何らかの意図により埋納した可能性が高い。

加藤嘉明が関ヶ原合戦後、松前城を廃し松山城へ移転した理由を確認しておきたい。松前城下町は石高増加により手狭になったことや、海に近い港町のため高潮被害に弱いことが考えられている。その他の要因として富田氏は松前城下町の研究から、朝鮮出兵の際には、海に近い港町は水軍の物資や人員の調達に有利であったが、戦乱後は必要ではなくなったこと、また、領国経営の方針が近世的な経済の中心地の形成へと重点が変換していったことをあげている（註26）。

さらに、加藤嘉明と松前城の移転に関して、『予陽郡郷俚諺集』（註27）に、松前城移転は嘉明の夢に現れた玉生八幡神社の神のお告げによるという口伝が紹介されている。

〈中略〉伝に云、加藤嘉明松前城住居の時、慶長五年正月朔日の夜夢想を得る、紺地金泥の玉の字南面の床に懸る、嘉明弓箭甲冑を帯し是を見る、翌朝松本新左衛門占て云、是城地を可改神夢也口伝、同六年五月朔日の夜丑の刻、嘉明再ひ霊夢を蒙り、白扇に黒筆の玉の字南面の床に懸る、其外如前松本占卜を聞て云、是全城地を改むへき旨玉生八幡宮の御神託也口伝、嘉明是より改城之志を発し、同年三月五日、嘉明松前を出船し東武に赴く、〈後略〉

玉生八幡神社の神が加藤嘉明の夢に現れ、松本新左衛門の占いによると、城の地を改めるべきという神託を二度にわたって示されたため、嘉明は改城を決意したという。中世の「霊夢」譚である。玉生八幡神社は、図10で確認すると松前城の東北方向に所在し、城の鬼門の方角を守る神として重要視していたことが想定される。

これらのことを考え合わせると、一七世紀初めに松前城から松山城に移転する際に、加藤嘉明やその家臣が神への祈念や地鎮のため、青白磁梅瓶を二ノ丸に埋納した可能性があることを指摘しておく。

七、北琅について

箱書に見られる「北琅」とは、いかなる人物であろうか。重要美術品指定の記録に以下のような記述がある（註28）。

昭和二四年五月二八日重美三二六号官報号外掲載
工芸品及び考古学資料の部
「青白磁瓶子　伝伊予松前古城址出土」
所蔵　内島喜太郎　長野県上水内郡安茂里村小柴見

それによると、長野県在住の内島喜太郎が松前城梅瓶を所有し、昭和二十四（一九四九）年に重要美術品に指定されたことが判明した。

内島喜太郎（一八九三～九七八年）は本名で、北朗（ほくろう）とも称した。富山県生まれ。京都の陶芸家・俳人。河東碧梧桐に師事した。昭和一七～二七年に長野に疎開、長野県安茂里で陶芸を行った。長野県の「松代焼」の命名者とされる。陶芸では帝展に三回入選した。また、古陶を蒐集した（註29）。

「海南新聞」によると、内島は昭和一六年四月二六日から二八日に、松山三番町の美術倶楽部で「内島北朗氏新作陶器展覧会」を開催した。内島の個展は、松山市内では二回目の開催で、海南新聞社が本社六〇周年記念品の製作を内島に依頼している。昭和一五年の紀元二六〇〇年奉祝祭には大奉祝の大作花瓶を出品した。また、内島は、中国や朝鮮に渡り自ら陶器を研究し、帝展や商工展に数回入選、フランス万国博覧会には銀賞を受賞、近年は古陶収集を行っている、とある（註30）。

さらに、内島の著書（内島北琅「影青劃花文瓶子」『古陶の味』昭和二十二年）に松前城梅瓶について記述がある（註31）。

箱蓋の裏に、「影青劃花文瓶子は支那宋代の作、昔時日本に渡来、今日稀に高貴の古墳より出るのを見る、此品も明治四十一年伊豫国伊予郡松前城跡より発掘せし物也、胴部に鉄サビ附着せるは副葬品の痕なりと云ふ」と書付がある。

（中略）

私のこの瓶子は唐草雲紋とでも云うべく、六筋の櫛目で縦横無尽に渦を為してゐる。発掘であるが故に世の多くは傷が有るが、我が瓶子は幸いにして、無傷と云ってよい程に無難である。箱書にもあった通り、これは四国伊予の松山の近く松前城跡から出た物で、私が曾て松山に旅した時、この瓶を蔵する人ありと聞き、道後温泉のあたりに住むその人を訪ね、懇願してゆづつてもらつた物である。（後略）

陶芸家である内島北朗は、古陶をこよなく愛し、数多く収集していた。松前城梅瓶の入手時期は、昭和一六年に内島が愛媛の松山で個展を開催しているため、その頃に入手した可能性が高い。また、内島は、「胴の一部腰のあたりに、赤黒い鉄さびの跡がある。それが副葬品の跡である」としているが、現状では付着物は見られないものの、松前城出土品には、鉄刀なども含まれていたので、その鉄分が梅瓶に付着していた可能性がある。

八、おわりに

小稿で新たに明らかになったことを整理して結びにかえたい。

松前城梅瓶は南宋から元代の中国福建省系の貿易陶磁である。耕地整理によって明治四十一年に伊予松前城二ノ丸跡から出土し、松前町の工事請負人、次に道後の収集家を経て陶芸家・内島北朗が収集、その後、美術商を経て、出光美術館に収蔵された。「箱書」の内容は「正木史料」などの記述と符合するところが多い。近代に出土した陶磁器資料がその出土地の情報を有することは数少なく、松前城梅瓶のように箱書の伝来の情報と、地域の記録とが一致することは大変貴重である。

明治四十一年の耕地整理の際、松前城二ノ丸からは、貿易陶磁や金属資料が多

数出土した。記録からは、大甕の中に貿易陶磁を多数入れて地中に埋めていたことが判明した。そのため、松前城梅瓶は土圧などによって破損することなく完形で出土することができたと考えられる。さらに貿易陶磁器が松前城二ノ丸に意図的に埋納していたことが推測される。青白磁梅瓶は戦国武将に骨董的価値からステイタスシンボルとして所有されることがあり、松前城梅瓶も松前城に居城していた加藤嘉明やその家臣によって、威信財として所有されていたことが想定される。埋納時期は、加藤嘉明が松前城から松山城へ移転した一七世紀初頭と考えられ、何らかの意図により埋納した可能性がある。

松前城梅瓶は、愛媛県においてこれまでほとんど知られていなかった松前城出土資料である。中世伊予における貿易陶磁器の需要の有り方を考える上で重要な資料と位置づけられ、地域の歴史を解明する手掛かりとなる貴重な文化財である。

小稿を成すにあたっては多くの方に情報をご提供・ご協力いただきました。感謝いたします。

註

（1）田中作太郎「本邦遺跡出土の宋磁」『世界陶磁全集第一〇巻』河出書房新社、一九五四年。亀井明徳「宋代の輸出陶磁」『世界陶磁全集第一二巻』小学館、一九七七年。矢部良明「日本出土の唐宋時代の陶磁」東京国立博物館編『日本出土の中国陶磁』東京美術、一九七八年。出光美術館『開館十五周年記念展図録』、一九八一年。広島県立歴史博物館『瀬戸内の中国陶磁』、一九九一年。今井敦『日本の美術四一〇　宋・元の青磁・白磁と古瀬戸』至文堂、二〇〇〇年、他

（2）出光美術館『出光美術館蔵品図録　中国陶磁』平凡社、一九八七年。公益財団法人出光美術館『東洋の白いやきもの　純なる世界』、二〇一二年

（3）（公財）出光美術館、二〇一二年、註1前掲書

（4）遠藤啓介「景徳鎮窯青白磁梅瓶の編年的研究―宋・元代を中心に―」『貿易陶磁研究』№二三、二〇〇三年

（5）内野正「青白磁梅瓶小考」『研究論集』XI東京都埋蔵文化財センター、一九九二年

（6）今小路西遺跡発掘調査団編『鎌倉市今小路西遺跡（御成小学校）』、一九九〇年

（7）前掲書註5

（8）前掲書註5

（9）中野良一他編『南斎院土居北遺跡　南江戸圃目遺跡二次調査』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター、二〇〇四年

（10）中野良一他『湯築城跡　第三分冊』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター、二〇〇〇年

（11）柴田圭子「出土遺物からみた湯築城跡」『湯築城跡　第四分冊』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター、二〇〇〇年

（12）田中謙『史跡　能島城跡　平成一九年度郭Ⅰ・南部平坦地調査報告書』今治市教育委員会、二〇〇九年。田中謙『史跡　能島城跡　平成二二・二三年度郭Ⅱ（第二・三次）調査報告書』今治市教育委員会、二〇一三年

（13）小野正敏『戦国城下町の考古学』講談社、一九九七年

（14）愛知県陶磁資料館『戦国のあいち　「戦国陶磁を探る」』二〇一二年

（15）前掲書註1

（16）前掲書註2。箱書については金沢陽氏にご教示いただいた。

（17）玉井桂「稗史　幻の松前城」『松前史談』六号　一九九〇年。袖山俊夫「「正木史料」について（2）」『松前史談』二九号、二〇一一年。袖山俊夫「「正木史料」について（1）」『松前史談』二七号、二〇一一年。「正木史料」の調査の際には、二宮和広先生にご協力いただいた。

(18) 日下部正盛『加藤嘉明と松山城』二〇一〇年、『角川地名大辞典　愛媛県』角川書店、一九八一年、他。松崎のほか、真崎・正木・柾木・満崎と書かれた。寛永一二年後、松前に統一された（『日本歴史地名大系　愛媛県の地名』平凡社、一九八〇年）。

(19) 伊予史談会編『予陽郡郷俚諺集・伊予古蹟志』伊予史談会双書第一五集、一九八七年。『予陽郡郷俚諺集』は、松山藩家老奥平氏編纂。宝永七（一七一〇）年完成、増補宝暦一二（一七六五）年。

(20) 前掲書註19

(21) 西園寺富「松前城の沿革」『伊予史談』二十二号、一九二〇年。松前町誌編纂委員会『松前町誌』、一九七九年

(22) 富田泰弘「伊予松前城下町の復元に関する歴史地理学的研究」『地図と歴史空間　―足利健亮先生追憶論文集―』大明堂、二〇〇〇年

(23) 柚山俊夫氏に解読いただいた。

(24) 『明良洪範』国書刊行会、一九一二年

(25) 出土銭貨研究会四国ブロック編『中世の地鎮と銭貨』、二〇〇二年。石岡ひとみ「愛媛県松山市石手川公園内出土の丁銀・豆板銀」『研究紀要』九号、愛媛県歴史文化博物館、二〇〇四年他。

(26) 前掲書註22、富田泰弘「歴史地理学的研究による伊予松前城下町の復元―松山開府四〇〇年・松前廃城四〇〇年を迎えて―」『松前史談』二三号、二〇〇六年

(27) 前掲書註19

(28) 文化庁『重要美術品等認定物件目録』思文閣、一九七二年

(29) 日外アソシエーツ株式会社編『人物レファレンス事典　美術篇』紀伊国屋書店、二〇一〇年他

(30) 「海南新聞」昭和一六年四月二十六日

(31) 内島北琅『古陶の味』富書店、一九四七年

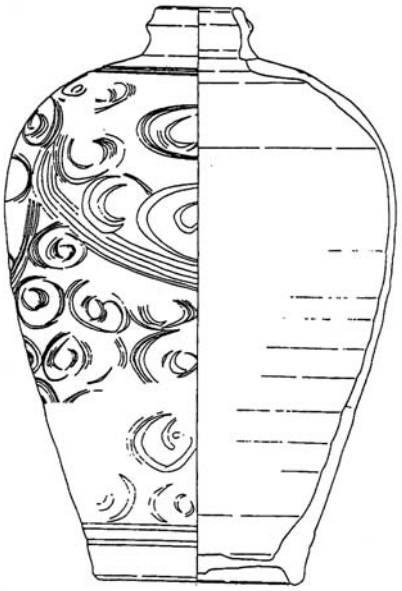

図２　鎌倉市今小路西遺跡出土青白磁梅瓶

図１　松前城跡出土青白磁刻花渦文梅瓶（出光美術館蔵）

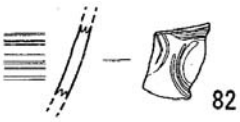

図５　能島城跡出土青白磁梅瓶

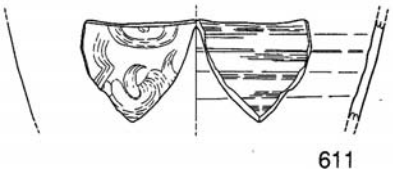

図４　能島城跡出土青白磁梅瓶

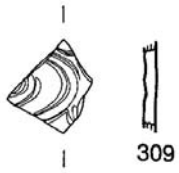

図３　湯築城跡出土青白磁梅瓶

（図２～５報告書転載）

図６　松前城梅瓶の箱書（資料１）（出光美術館蔵）

（図１・６・７は出光美術館写真提供）

図７　松前城梅瓶の箱書（資料２）（出光美術館蔵）

図８「正木史料」（松前町立松前小学校蔵）

図９　松前城・松山城の位置図

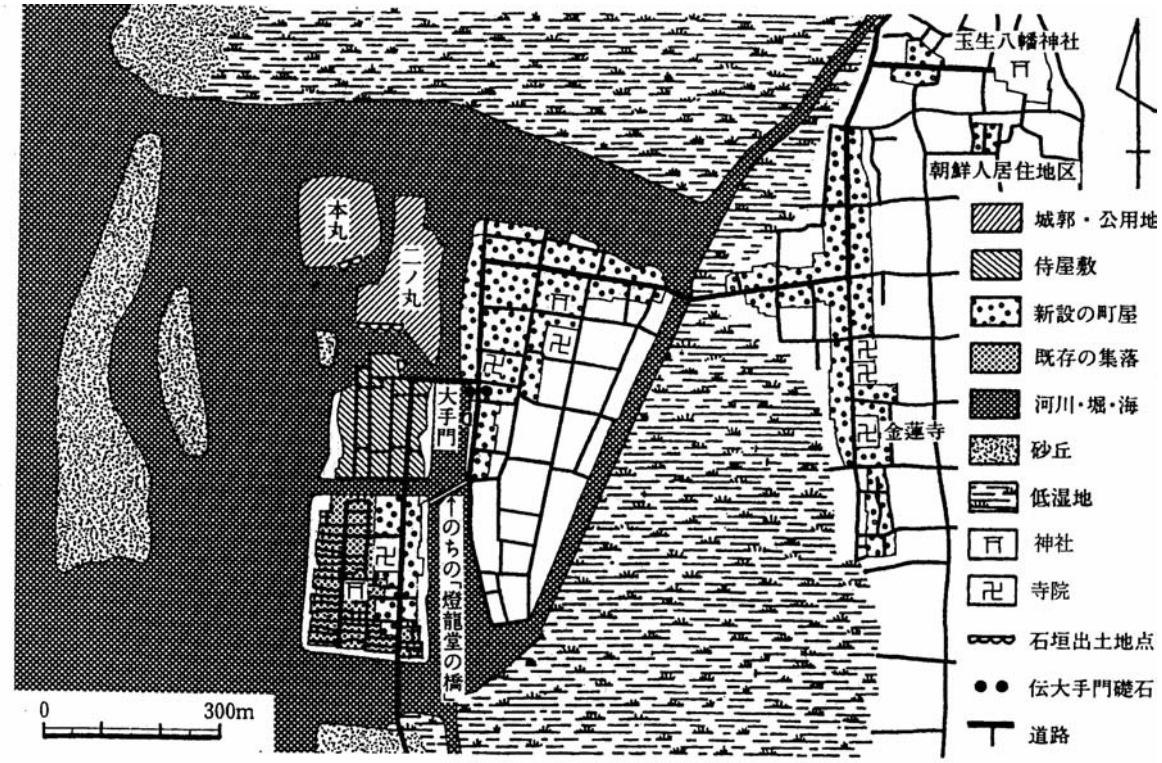

図 10　松前城下町の復元図（出典：富田泰弘 2000 年）

愛媛県美術館
平成24年度年報・研究紀要第12号

平成25年９月発行

発行所　愛 媛 県 美 術 館
愛媛県松山市堀之内
TEL.089-932-0010
FAX.089-932-0511

印刷所　株式会社 明 朗 社